OB 紹介

樋口 浩二さん
（平成十五年度入学）
中国新聞社 松江支局

○仕事内容

簡単に言うと、新聞の記事を書く仕事をしています。私は、島根ブロックで働いていて、主に中国新聞の島根版を担当しています。また、県政を主に担当しており、普段は県庁にいます。

日々やっている仕事は、人に会って、話を聞いて、記事を書くということですね。そして個人個人でその分野が分かれています。入社したての1年生はたいてい警察を担当します。事件・事故を取材して、その事実関係や背景を記事にします。他には県政、市政、また、遊軍という、行政の枠にとらわれずに、気象や教育、イベントなどを取材する部署もあります。

また、私たちは出稿部という記事を出す方の部署ですが、記事のレイアウトや見出しを考える整理部という部署もあります。

○仕事のやりがい・魅力

やりがいは仕事がはっきりと形になることですね。例えば、自分なりに面白いと思った記事を書いた次の日の朝は記事を読むのにわくわくします。行政を担当していると、行政にとって手厳しい意見も書くわけですが、たとえ厳しい意見でも、その真意を読者や取材対象の人に納得してもらえたときは小さなうれしさを感じます。

また、和やかないい話を書くことがたまにあって、書いた人や、一般の読者から、良い話ですねと言ってもらえるとうれしいですね。昔、報道部の時に、「いい日」っていうコーナーがあって、それを担当したことがあったんです。いい日というのは、とにかく心温まるいい話を紹介するものでした。些細なことでいい、良いことをとことん突き詰めて取材して書こうというコーナーです。これを一年生の時に先輩の記者二人で担当して、二人で取材をしたんです。でも何から取材をすればいいのかもわからなかったんです。良い話ないですか？って公民館とかにいきなり行って、とりあえずネタを探して来いっていう感じだったんですけど、意外にあるものでした。このコーナーでは、何も情報がない段階から自分の足で見つけて書くので、私たちの一番大事な、ネタを取ってくる能力が鍛えられたかなって思います。その時に一般の読者の方が、新聞社に感想を手紙で寄せてくれるようなこともあり、やりがいを感じました。

○なぜ中国新聞社に入ったのか

最初は先生になろうと思っていました。一応就職活動はやっていたけど、絶対どっかの企業に行きたい、というのはなかったんです。先生の免許があったから、教員に何となくなるのかな、ぐらいに思っていました。何社か民間を受けて、その中の一つが中国新聞社でした。何で受けたといえば、普通の会社のサラリーマンはピンとこなくて、新聞って、活動自体が自分でネタ取ってくるところから始まるから、たぶん自由度が高いんじゃないかなって思ったというのが正直な所です。マスコミ志望でずっとやってきた人も私たちの業界にはいて全国の大学には、ジャーナリ

ズム論などのゼミまである大学もあります。そういうのを学んだ上で、時事問題を勉強したりして、マスコミを受けたりする人もいるんですが、私は先生になると思っていたから恥ずかしい話ですが、関連の勉強はほとんどやっていませんでした。最初はきつかったですね。ひどく怒られていました。記事は数十万人の人に届くから責任が重いんです。今考えたら分かるんですが、1年生の時はその責任が十分に分からなくて、よく上司に怒られていました。インターネットの匿名サイトなどでは好きなことを書けますが、新聞はそうはいかないですからね。ただ、新聞社というのは、「ある程度怒られて当たり前」と割り切っていました。個人的な思いとしては、最近は怒られ弱い人が多いのかな、と感じています。大学生活が楽しい半面、そのギャップで余計そう思うのかもしれないですが。あと、私は、新聞を取っていましたが、どうやって書くのか、という視点では全く読んでなくて、最初に書いた記事は全部直されました。今では直される割合はだいぶ減りましたが、あまり原稿を直されなくなるようになるまで5年ぐらいはかかりました。

○なぜ総合科学部に入ったのか

出身は福岡なんですが、九州を出たくて、一人暮らしがしたかったから、本州に行こうと思ってました。それに、学力的に広島大学を目指すのがちょうど良くて、頑張って勉強したらいけるかなというのも正直ありました。あと、しょうもないことですが、広島は福岡からそんなに遠くないし、ちょうどいい距離だったからというのもあります。そして、何をやりたいかっていうのがよくわからなくて。外国の異文化に触れるようなことがやりたいと思っていたんですが、曖昧だったから、明確な学部の志望が決められなかったんです。でも、総科だと当時で言えば、地域科学プログラムというのがあり、外国のことを学ぶことができたんです。しかも、総科はプログラムを選ぶのに一年間の猶予がありました。とても曖昧な理由で参考にならないかもしれませんが周囲にはそんな人が多かったように思います。

私が地域科学プログラムに入った理由は、外国の暮らしや異文化に興味があったのと、違う文化や生活習慣で生きている人に興味があったからです。そういう人たちとどうやったら共生できるのかを掘り下げたくて。世界の各地で差別があったり、戦争があったり、そういうことはなんで起こるのかなという点に興味があったんです。

最終的に私は卒論で、出身地の福岡県直方市にあった炭鉱について研究しました。八幡製鉄所に石炭を供給していた筑豊炭田で、その地下を掘っていた女性坑夫たちの日常について調べました。結局、外国の話や文化を学ぶと、自分の地元のことを何も知らないということに行き着いたんです。だから、これはやっぱり知らないといけないと思いました。外国の文化や歴史を学んだ上で、一周して地元に戻ってきたというイメージです。

○総合科学部に入ってよかったこと

いろんな人と知り合えたのがよかったです。友達の就職先もみんなバラバラなんです。だから、いろんなものが得意な人と知り合えたのかな、と思います。それが一番ですね。

文理問わず友達ができるのは総科の特権だと思います。それに、地域科学プログラムはすごい仲が良くて、最後には皆で下関市に旅行に行ったんです。そういう出来事はすごく思い出に残っていますね。

○総合科学部に入って生かされていること

人間関係が広がったことによって、いろんな人の話が聞けたことというのが、自分の肥やしというか、教養になっているのかな、と思うことはあります。

○大学生活の思い出

楽しい思い出しか残ってません。みんなで鏡山公園でバーベキューしたり。島根の浜田の海に行ったり。オリキャンは絶対に二年生の時のほうが楽しいですよ。一年の時って初めてのことでよく分からないけど、二年生になったら余裕が出て、二年生の方が楽しめるものだと思います。

また、友達っていうのは作ろうと思って作るわけじゃなくて、自然にしてて仲良くなるものです。その人たちといろんなことをやって、今でもその人たちと会っているということ、それが宝です。会社で普段働いていると、やっぱり仕事の話を全部忘れて話をしたいなっていうときがあります。そういう時に大学の友達がすごく支えになっています。

○今の総科生に一言

せっかく総科にはいろんな専攻の人がいるし、いろんな個性や特技を持った人もいるだろうから、そういう人たちと幅広く付き合って、とにかく楽しい生活を送ってほしいです。私は社会人になって、それが財産になるということが身をもって理解できました。だから、勉強しろ、というよりも楽しいことを目一杯やって、多方面の人と仲良くなって、それを社会人になった時に糧にしてほしいなと思います。絶対にそれが財産になると思います。

人付き合いや人間関係に尽きる気がしますね。大学生活ではいろんな人との付き合い方を体験できるけど、それは社会に出ても一緒だと思います。

また、私が青木先生の研究室訪問に飛翔の取材で行ったときに青木先生が言っていたことで印象に残っているのが、「西条にこもるな」という言葉です。西条は広大生ばかりで楽しいから、西条だけで生活しようと思えばできる。でもそれだと価値観が狭くなるから、狭い西条から飛び出しなさい、と言われました。それは精神的にという意味も含めて、学生たちの町にとどまらずにいろんな社会の人を見るべきだという意味だったんだと思います。私はこの言葉を一年生の時に聞いて、いい言葉だと思いました。だから、今の総科生にも送りたいですね。

【担当】25生　大城　温子
25生　大塚　侑奈
25生　三山　まりこ
25生　森田　みなみ